プロティノスのエネアデス

「プロティノスの実体について、あるいは性質について」II-6-(17)

「実体」はウーシアに置き換えた

ウーシアの形容詞形がウーシオスである

1
いったいオン(有)とウーシア(実体)とは異なるのか。そして、オンとはその他のものを剥ぎ取られたもので、ウーシアとはその他のもの——つまり、動・止・同・異であり、そしてこれらは前者の要素である——を伴うオンであるのか

とすると、この全体がウーシアで、かのものら(五つ)のおのおのは、あるものはオン、あるものは動、あるものは別の何かである

とすると、動は付随的にオンであるが、しかしウーシアとの関連では、果たして動は付随的にウーシアであるのか。それども、ウーシアを構成する一要素であるのか

いや、動はそれ自体が一つのウーシアなのだ。また、かの所にあるものはすべてウーシアなのだ

では、どうしてここでも、そうではないのか

それは、かの所ではすべてのものが一つのものであるが、ここでは映像が分断されて別々ものものになっているからである

それはちょうど、子種の中ではすべてが一緒であり、それぞれがすべてであって、手だの頭だのが離れ離れということはないが、ここでは、それらが互いに離れているのと同様である

なぜなら、これらは映像であって、実物ではないからである

性質とはウーシアの差異を示すものではない、ウーシアに付随的なもの

すると、われわれはこう言うべきだろうか。かの所では、諸々の性質は、ウーシアの差異として存在しており、ウーシアにもしくはオンに付属しているのだが、しかしそれらは、ウーシアを互いに異なるものたらしめる差異、したがって結局のところ、ウーシアそのものを作り出す差異である、と

いや、その考えはおかしくはないが、ただしここでの性質には(あてはまらない)。なぜなら、これらの性質のあるものは、たとえば<二本足の>や<四本足の>のように、ウーシアの差異であるが、他のものは差異ではなく、<性質>という単にこの名称でのみ呼ばれるのだからである

その上また、同じ性質でも、構成する差異であるが、他のものにおいては、差異ではなく、ウーシアを構成しないで、単に付随的なものである

とすると、定義に含まれる<白い>は構成要素であって、性質ではないが、他方、表面に見られるだけの<白い>は性質である、と言うべきだろうか

たとえば<白い>は、白鳥や鉛白においては(ウーシアを)構成し、君においては付随的なものである

このことが、魂に生じるのであろうと、物体にであろうと

いや、それとも、性質を区分して考えるべきだろうか。すなわち、一つは実体的な(ウーシアのもつ)性質で、これはウーシアのある特性であり、もう一つは単なる性質であり、これによってウーシアは、しかじかの性質のウーシアとなる

つまりこのばあい、性質は実体そのものの内に何らかのちがいを作り出すのではないし、ウーシアの内から生じるのでもなくて、すでにウーシアがあって、充足された後で、外からある様態を与え、その物のウーシアに何かをつけ足すだけであるのだろうか

しかし、鉛白に見られる白さも、それの構成要素であるとすれば(どうか)。というのも、白鳥のばあいだと、白さはそれを構成するものではない。なぜなら、白鳥は白くないことも可能だろうから

しかし、鉛白のばあいは、それから火の熱さにしてもだ

しかし、火性こそウーシアであり、鉛白のばあいも、これに対応するものが(ウーシアだ)、とだれかが言うとすれば

しかし、それでもやはり熱さが目に見える火を構成しているのだし、また他方のもの(鉛白)のばあい、白さがそうなのだ

だから、同じものが構成するものであって性質ではなく、また(他のばあいには)構成するものでなくて性質であるのだ

そして、そのものが構成するものの内にそのものがある時と、そのものが構成しないものの内にそのものがある時とで、そのものが別々のものになると主張することは、不合理である。そのものは同じ本性なのだから

しかしそれではこうなのだろうか。つまり、それらを作り上げたロゴス(原理)は、すっかり実体的なものであるが、他方、作り上げられたものは

——あそこでは<テイ(もの)>であるが——

ここでは<もの>でなくて、<どのようなかのもの>の幻影に過ぎないのだろうか

だからこそ、われわれが<もの>を探求する際に、いつでも失敗して、それの周りでつるりと滑って、性質的なもののところへ行ってしまうのである

というのは、火とは、われわれが<どのようであるか>に注目して、これだと言うものではない

火はウーシアであり、他方、われわれが今見ているもの、そしてそれらに注目して言うところのもの(熱い、明るいなど)は、実はわれわれを<もの>から遠ざけて、その結果われわれは<どのようであるか>を定義することになる

そして、感覚されるものに関しては、それはもっともである。なぜなら、それらの何ものもウーシアではなくて、ウーシアのパトス(様態)にすぎないのだから

——ここから、あの、いかにしてウーシアでないものからウーシアが生じるか、という問題も(解ける)

つまり、生じたものが、それがそこから生じたところのものと同じものではありえないことはすでに言われたが、今ここで言われねばならないのは、生じたものはそもそもウーシアではない、ということである

しかし、かの所では、われわれがウーシアと呼んだものが、ウーシアでないものから生じる、とわれわれは言ったのだが、これはどうしてか

われわれは、こう答えるだろう。かの所でのウーシアは、もっと本来の意味での、もっと純粋なオンをもっているので——区別されうる限りにおいて——真にウーシアである

いやむしろ、活動が付加されたものがウーシアと呼ばれているのであって、それは前者の完成であるように見えるけれども、おそらくはこの付け加えのために単純さを失って、すでにこれから遠ざかっているのである

ヌース(英知)が第一の活動である

2
しかし、性質について、それがそもそも何であるのかを考察しなければならない。なぜなら、それが何であるかが知られたならば、諸困難も多分よりよく打開されるだろうから

そこでまず第一に、先のあの問題を、すなわち同じものが、あるばあいには単なる性質であり、別のばあいにはウーシアを構成する要素であると考えるべきかどうかを探求しなければならない

その際われわれは、性質がウーシアを構成しうることに対して、むずかしい顔をしないで、それはむしろ、ある性質のウーシアを構成するのだと

さて、そこで、ある性質のウーシアのばあい、それがある性質である以前に、ウーシアが、つまりそれがまさにそれであるところのものが存在していなければならない

では、火のばあい、ある性質のウーシアの前にあるウーシアは何か。それは物体だろうか。とすると、類が、つまり物体がウーシアである

そして、火は熱い物体だが、この全体はウーシアではなくて、熱さが火の内にある仕方は、君の鼻の上向きがある仕方と同じであろう

しかしそれならば、熱さと明るさと軽さ——これらは性質であるように思えるのだから——と不可入性が取り去られたばあいに、三次元性が残るわけだから、素材こそウーシアであることになろう

しかし、そうは思えない。なぜなら、むしろ形相がウーシアなのだから

しかし、形相は性質である

いや、形相は性質ではなくて、ロゴス(条理)である

ロゴスにより発動されて、形相がヒュレーと合成されて有るものになるのでは

では、条理と下に横たわるものとから成り立つものは何なのか。というのも、それは目に見えるもの、つまり燃えているものではないのだから。これはある性質にすぎないのである

このときのエネルゲイアと「作用」は同じなのか?

ただし、「燃える」は(火の)ロゴスから出るエネルゲイア(働き)だ、とだれかが言うなら別である

このばあいには、<熱する>や<白くする>やその他のことも作用(働き)であることになろう。したがって、性質というものを認める余地は、どこにもないことになるだろう

いや、これら——ウーシアの構成要素だと言われる限りのもの——は、もし果たしてこれらrのうちの何ほどかのものが原理と実体的な能力から発する働きであるとすれば、それは性質と呼ばれるべきではない

ウーシオス能力、とも訳せるのだが、ウーシア的な能力とは何か??

しかし、すべてのウーシアの外にあるもので、ある所では性質として、また他のものにおいては性質でないものとして現れることのないもので、ウーシアに後から加わった余分なものをもっているものは

性質とは、ウーシアの上に形づけられている、何らかの性状であり、それらは働きである

たとえば、徳と悪徳、醜さと美しさ、健康、あるふうに形づけられていることが性質である

ただし、三角や四角それ自体はある性質ではないが、「三角に形をつけられていること」は、形を与えられている限りにおいて、ある性質と呼ばれるべきである

だから、結局、性質とは、すでに存在するウーシアの上に加わる何らかの性状である

また、「三角性」はちがうが、形づくられていることは、ある性質である。また技術や適性も

それは、後から加えられるものであっても、また初めから(ウーシアと)一緒にあるものであってもよい

しかし、仮にこの性状が一緒でなかったとしても、ウーシアそのものは少しも減少しないえあろう

また、この性状は移動しやくても移動いにくくてもよい。したがって、性質には二種あることになる。一つは移りやすいのおで、他は安定したものである(アリストテレス『カテゴリー論』8,8b27)

アリストテレスは、移りやすいものをディアテシス、安定して物をヘクシスと呼んだ

知性界

感性界

性質と看做されているものはエネルゲイアにあるものから発せられるものである

諸性質は、やはり働きである

3
だから、君の色の白さは性質ではなくて、働き、つまり白くする能力から発する働きである、と考えるべきだ

性質(とみなされているもの)はすべて働き

また、かの所では、いわゆる性質はすべて働きである。それらは、ただわれわれの思いなしによって、ある性質とみなされているのだが、

性質->働き
特性-<性質という同義を反復している

その理由は、それぞれの働きが特性であるので、ウーシアと相互に区別しており、また自己自身に独特の性格を付与してもいるからである

それぞれの働きが特性だから

かの所の働きは示されない

では、かの所での諸性質はどこでちがうのだろうか。というのは、ここの諸性質も、やはり働きであるのだからら

それはこうだ。ここでの諸性質は、基体がどんなものであるかをも、それの変化をも示さないで、いわゆる性質——これはかの所では働きであるが——だけを示すのだ

したがって、それがウーシアの特性を含むばあいには、それがなんらかの性質でないことは、直ちに明白である

しかし、われわれのロゴス(理性)は、かの所のものの表面の特質を引き離して

——そこからそのまま引き剥ぐというよりも、むしろそう理解して、別のものを自分で生み出すという仕方で——

何らかの性質を作り出すのである。つまり、表面に現れたと理性に映じたものをウーシアの一部だと解するわけである

しかしそうだとすると、熱さについても、こう考えていっこうに差し支えないだろう

すなわち、それが火の本性と結合している限りでは、それは火の一つの形相であり、働きであって、火の性質ではない

しかし、他方、それは別の意味では性質である。つまり、熱さが他のものの内にそれだけで取り入れられて、もはやウーシアの姿(形相)ではなく、それの属するウーシア

——それがこれの働きであるところのウーシア——

を去って、単なる痕跡であり、影であり、映像であるばあいには、それは性質である

だから、たまたま付随しているものであっても、ウーシアの働きでもなく、それの姿を提示する形相でもないものは、すべてある性質である

たとえば、基体とは別のものとしての性向(ヘクシス)や状態(ディアテシス)も性質と呼ばれるべきである

しかし、これらのものが第一次的にはそこに内在しているところの、これらのものの原型は、かの所のウーシアの働きと(呼ばれなければならない)

だから、同じものが性質にもなるし、性質でないものにもなるわけではなくて、

ウーシアから引き離されたものが性質で、それ(ウーシア)と一緒のものがウーシア、あるいは形相、あるいは働きである

なぜなら、何ものも、それがそれ自体であるばあいと、他者の内にそれだけではいって、形相と働きであることをやめたばあいとでは同じものでないのだから

しかし、どんなばあいにも他者の形相とならないで、いつでもたまたま付随するだけのもの、これが、しかもこれのみが、純然たる性質である

他者に付随するのではなく、入り込むばあいがあること、の布石か?